

Title	中国文学に現われた女性像について
Sub Title	Chinese literature
Author	村松, 暎(Muramatsu, Ei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1965
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.19, (1965. 1) ,p.16- 25
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : 文学・芸術に現われたる女性像
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00190001-0016

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中国文学に現われた女性像について

村 松 暎

一

本題は「文学にあらわれた女性像」であるが、周知のごとく、中国は世界に冠たる男尊女卑の国という、いささか特殊な事情があるので、まず、女性の地位、男女間の関係、恋愛等の問題に、ざっと触れておくことにする。

いかなる意味においても、女性には自主性は許されていなかった。「婦人には自主的な道はない。嫁入り前は父に従い、嫁しては夫に従い、夫が死んだら息子に従う。」(『儀礼』『大戴礼』『両書』表現に多少の違いはあるが、趣旨はまったく同じ)と、『三従の義』が厳然と規定されている。自主性を許されぬ女性は、したがって社会的存在たり得ない。内にあって家事につとめるのが本務だから、学問は無用であり、生はんにかに学問をかじって鼻にかけるくらいなら、文盲の方がよい。というわけで、立派な大家の娘でも、文字は知らぬのが普通であった。かといって、才や学があつてはならぬというわけではなく、『才色兼備』(『後漢書』閻皇后伝に「后才色あり」というのが起りらしい。)は、やはりほめ言葉であり、後漢の班昭は学問をもって和帝に事え、唐の魚玄機、薛濤、宋の李易安らの詩は

男の間でも愛誦された。要するにズバ抜ければ女性でもやはり尊敬されるのであって、一律に片づくものではない。

男女間には地位の差だけでなく、きびしい「別」があった。『礼記』の有名な文句「七年男女席を同じゅうせず」の席は座席で敷物の意味だそうだが、七歳の子供にこれだけの区別をさせるというのは、やはり相当なものである。男女の間では、物の受け渡しも直接にしてはならなかった。『孟子』の中で、淳于髡がこれに關聯して「では嫂が溺れた時に手をさしのべて救うのはどうか。」と問を發している。これに対して孟子は「もちろん手で助けるのだが、これは火急の場合で、権（方便）だ。」と答えている。命を助けるのにも相手が女だと、権だなどと、いいわけが要るのだから厄介なことである。そのくらいだから、勝手に恋愛などするのは、もつてのほかのことで、そのような行いは淫奔ときめつけられる。

男女の間が道徳でどう金しぼりにされていては、文学が女性ないしは恋愛について語るのには、なほだしく不便であったことはいうまでもない。詩には女性の美しさを詠じたものも、恋情をうたったものも、相当数あるにはあるが、中国の詩全体から見れば、ほんの一部にすぎない。それらを大きっぱに見て感じとることは、驚くほど千篇一律で、女といえばなよなよとして妙に性的であり、恋情はすべて、空闊をかこつ女が男を想うといった体裁をとっている。こうなると、いっそ『詩経』の恋の歌の方が素朴なだけに新鮮で健康な感じがする。『詩経』はまだ儒教が成立する前のものだから、人の心が束縛されることが少く、自然に近かったためであろうか。ともかく、そういった性質の詩を集めて、そこから女性像を抽出するのは、能率の悪い話である。まして私はその任ではない。女性像を求めるとすれば、戯曲、小説、ことに小説を対象とするのが便利であろう。戯曲にももちろん女性が登場するが、中国の戯曲は種種な制約を負っており、そのため人間の真実の追求という点は、いささかなおざりにされていた。その点小説は制約が最も少く、人間の種々相を描くの比較的都合がよかった。中国文学の中の小説の地位、ことに白話小説のそれは、はなはだ低かった。低いというよりは、「地位」など持たなかったという方が正確であるかもしれない。文を尚ぶこと中国におよぶ国は世界にも例があるまいが、その場合「文」といわれるのは古典的な文語体の文章のことであり、車夫馬丁すら口にする口語つまり白話などは、いかに文字をもって綴ろうと、文とは認められなかった。また儒教の倫理は、きびしく仮空を排する。その最も輕蔑され非難されるものをもって成り立っている白話小説が、文学と考えられなかったのは、当然のことであった。その無価値性と背徳性が、白話小説の発展をさまたげる大きな

原動力であったことも事実だが、儒教的正統の立場から無視されたということが、そこにある程度の自由をもたらしたということも否定出来ない。中国の文学の中で、白話小説が、女性について、他の諸形式の文学にくらべて、最も多くを語ることが出来たというのは、ここにも大きな理由があると思われる。

ともかく、小説は人間の生活のもろもろの様相を描き出すものだから、いかに中国とはいえ、女性や、男女の情事について語らぬわけには行かない。その点で『金瓶梅』と『紅樓夢』は、古来双壁とされているものだから、その辺に主眼をおいてのべることにするが、その前に、中国人がどのような女性を美人と見ていたか、美人を描写するに当って、どのような表現を用いているか、といったようなことを、ごく大ざっぱではあるが、見ておくのも、悪くはなからうと思う。

二

どこの国でもそうだろうが、美人の型を大きく二つに分けると、ほっそりすらりとした痩せ型と、豊満で肉づきのいい肥えた型、ということになる。中国では前者の代表が西施や趙飛燕であり、後者の代表が楊貴妃で、『趙瘦楊肥』という成語があるくらいだ。日本では、平安朝では丸顔のオカメ型が生まれ、江戸時代には細長い顔が喜ばれたというように、比較的はつきりと時代の好みの変遷があったようだが、中国ではその点それほどはっきりしたものがあるかどうか知らない。

とはいっても、詩については、ほっそり型の方が優勢と見られる。唐詩や宋詞を見ても、肉づきが豊かだというような形容をしている文句は見当らず、『細腰』（劉廷芝「公子行」）『柳腰』（婁娜腰肢）（韓偓「春尽日」）『婁娜』（織腰一把）（周彦邦「花解語」）『織纖手』（李清照「点絳脣」）等、ほっそり型に属する形容ばかりである。もっとも、唐詩だ宋詞だといっても、それらをくまなく調べたわけではないので、ひょっとしたら豊かな肉づきの女を詠じたものがあるかもしれないが、手もとにあるもので見た限りでは、楊貴妃を除いては、楊貴妃型の女性には出合わなかったのである。先にのべたように、中国の詩が詠む女性ほとんどがメソメソした女ばかりである。いくら美人でも、肥えふとっていては、愁いに沈んでも詩にならないからかもしれない。

小説には詩のような束縛がないから、肉づきのいい美人も少くない。『金瓶梅』の潘金蓮は、『捻々楊柳腰兒』とあって、これは瘦

せ型。孟玉楼は、長挑身材、模樣兒不肥不瘦”とあるから、丈けはスラリと高いが、太からず細からずというわけ。李瓶兒は、“五短身材”で、小柄だというだけで、ふとっているのか瘦せているのか描写がない。『紅樓夢』では、瘦せ型の代表は林黛玉で、“行動時如弱扶風、……病如西施勝三分”だから、西施以上というわけだ。王熙鳳も“身量苗条”とあって、ほっそり型。探春も“削肩細腰、長挑身材”というのだから、すらりと細い。ふとっているのは薛宝釵で、黛玉の西施型に対して、楊貴妃型。宝玉に腕環を見せてくれといわれて、外そうとするが、なかなか抜けないほどふとっている。迎春も“肌膚微豐”とあって、肉づきはいい方である。『十二樓』にもとりどりの美人が出て来る。「奪錦樓」の銭家の双兒娘は“海棠着雨、茵茵絳風”とあり、雨にぬれた海棠か、風にゆれる蓮の花だというのだから少くともふとってはいいことになる。「夏宜樓」の嫺嫺は“櫻桃艷李之姿”美しく咲きみだれた桃か李の花のようだとあり、豊満な美人というわけだろう。「弘雲樓」の韋家の小姐は“豐似多肌”で、はっきりと肉づき豊か。「十卷樓」の屠家の令嬢は“輕盈綽約”たおやかだというのだから、ふとっているとは思われない。

こんなことを並べていたらキリがないが、もう少し白話小説の女性の容貌の描写についてのべてみる。中国の旧文学はすべて“型”で成り立っており、これはあらゆる点についていえることである。白話小説の女性の容貌容姿の描写は、多く地の文から離れて韻文めいた文体をとっている。調子のよい文句を並べて、いろいろな部分を順に描写して行く。その部分の描写の文句も、だいたい定ったものがあって、眉なら、蛾眉、新月、春山といった類、唇は桜桃といった塩梅である。こういったものを並列して行くわけで、その最もいちぢるしい例は『金瓶梅』の金蓮の描写であろう。全体を訳して行くと、あまり長くなるので、形容している物だけ挙げると、髪は鴉の羽、眉は新月、眼は杏、口は桜桃、鼻は瓊瑤（美玉）、腮は紅艷（これは物ではない）、臉は銀盆、身は花朵、手は葱枝、腰は楊柳、臍肚は白面、脚（足）は尖龜（とがっている、纏足の爪先）、胸は姍々、腿は白生々、以下紳士の口にすべからざる方面にまでおよんでいる。ただし、ここは地の文に入っており、これにつづいて韻文の描写がまたつづいている。腹と胸以下の描写は、もちろん普通の小説にはないが、その他の部分を形容する文句はだいたい定り文句で、『紅樓夢』の宝釵の臉は“銀盆”眼は“水杏”黛玉も“杏眼”とある。指を葱に喩えた例は、忘れたが何かで見た記憶がある。鼻が“直隆々瓊瑤鼻兒”とあるのは、高く形が整って、いささか冷たい感じがするのだろうが、これは珍しい。どだい鼻を描写すること自体が珍しく、ほかに『紅樓夢』の迎春が“鼻膩鵝脂”だとある

くらしいものではないだろうか。『金瓶梅』は定り文句も用いているが、話本類のように月並ではなく、孟玉楼の顔には少しそばかすがあって魅力的だなどと、なかなかしゃれたことをいっている。

女性の体を描写する場合、中国を除いて他の国の文学にはあり得ないのは足である、纏足が中国特有のものなのだから当然のことだが、これはほとんどの場合、『金蓮』と、『蓮のはならびに喩えられている。ただし『紅樓夢』には、纏足のことは出て来るが、女性を描写して足に及ぶことがない。曹雪芹はあまり纏足好きではなかったのだろうか。『鏡花縁』のように積極的な纏足反対も唱えていないが、讚美も見当らず、笑話の中で纏足の足の臭さのことをいっている。

李笠翁の『閒情偶寄』の「声容部」の「選姿第一」は女の選び方を論じたもので、「肌膚」「眉眼」「手足」「態度」の四つに分けてのべているが、笠翁一流の論理に面白味があるといえはいいが、煎じつめたところは存外常識的で、啓発されるほどのものはない。肌は白いのがよい、肌のキメが細かくなめらかなのは白くしやすいが、粗いのは白くしにくい。目が細く長い女は気持がやさしく、大きくてデカいのは気が強い。黒目と白目がはっきりしていて、よく動く女は利口だが、目に動きがなく、白目が多くて黒目の小さい者、あるいは黒目が大きくて白目が少ない者は愚鈍だ。——といった類で（以下は略す）、さしたることもない。

三

中国文学で女性を語るとすれば、まず『金瓶梅』と『紅樓夢』であろう。『金瓶梅』は人間の醜を描き、『紅樓夢』は女性の美を描いた小説である。その点、まったく対照的であるといえる。

『金瓶梅』で面白いのは、主人公の西門慶が、たいへんな漁色家であるだけでなく、物慾、権勢慾も旺盛なものに対して、女主人公潘金蓮は性への慾望一本槍であることだ。醜を描きながらも、男と女の相違を、ちゃんと書き分けている。西門慶はともかくとして、金蓮についていうならば、彼女は己の性の慾望を満足させるためには、金や名誉はおろかなこと、平穏な生活も眼中になく、犯罪も辞せず、相手の男すら喰いつくして悔いない。彼女は精神的なものなどはカケラも持合わさぬ、性の権化である。

金蓮も武松に対しては誠意をつくしているかに見えるが、この場合にも、彼女の関心はセックスにしかならない。彼女は夫の武大がちん

ちくりんの醜男で、おまけに魯鈍で「肝腎な時にさえテコでも動かない」から不満はつるばかり、戸口に出て見さかひもなく男を釣りはじめ。武大は不体裁でそこに住んでいられなくなり、引越しをしたというくらいに男好きである。それが夫の弟で、虎を打ち殺したほどの偉丈夫の武松に出会ったのだからたまらない。さっそく親切ごしかに、うちへ来ていっしょにお住みなさいよとすすめて、そのうちにたらしこんでやるうという魂胆だ。恋などといえるような、いじらしい料見とはわけが違ふ。この辺の事情が、詩ではつきりと説明されている。

武松の儀表甚だ搦搜すばたく

阿姨淫心収むべからずあはよの

帰り来て家里に住めと籠絡しいへ

雲雨を同じくし風流を会にせんとすよきこと

ところが、

武松正大にして原より犯し難しもと

で、簡単に思い通りにならないから、あれこれ手をつくす。腕によりをかけてサーヴィスしたのが、かえって武松を怒らせ、金蓮はみごとに釣りに損じてしまう。

西門慶との密事が露顕して武大を毒殺し、第五夫人におさまるが、夫を殺したことなど蚤をつぶしたほどにも思っていない。西門慶の足がちよっと遠ざかると、小者と密通する。李瓶児に子供が出来て、男の愛情がそちらに移ると見るや、邪魔物の赤ん坊をうまく殺して、男を独占しようとする。その異常な独占慾も、男への愛から出ているのではない。だから西門慶が重病にかかって床を離れられなくなったのをいいことにして、淫薬を吞ませて、キリもなく慾望を満足させる。西門慶は文字通り精根つきはてて死んでしまうのである。その後でも、金蓮は西門慶の女婿の陳経済と密通を重ねる。潘金蓮は、女の業を煮つめて具現した女性である。

『金瓶梅』が醜の世界を展開して見せるのに対して『紅樓夢』は美を描いた小説である。そしてその特徴は、この世の美が女性よ

て体现されていると見るところにある。

中国では奇しくも女性の地位は小説のそれと浮沈をともししているように見える。明の中期ごろから、一部文人の間に女性に対して寛大な態度を表明する者が出はじめたが、それはさらに明末に至り、宋学のきびしい礼教的規範に対する反発となった。そのような言動は李卓吾ら極く一部の人士の間に見られた現象で、一般の識者からは、正道を踏みはずした異端外道の思想とされた。李卓吾は社会的な意味では女性を男性の下に置くことに反対し（『焚書』、彼は女性の平等だけでなく、人間の平等を主張している。）文学的な面では、人間の純粋な心情の流露したものをよしとし、戯曲、小説を伝統的な詩文と平等に見た。これは先にのべたごとく、思想界の一部に起った現象であったが、小説にとっては、百万の援軍を得たに等しかった。この流れは文学批評家としては金聖歎を生み、作家としては李笠翁、吳敬梓を生み、曹雪芹を生んだのであった。李笠翁は生の享樂を主張し、吳敬梓はいたずらに形骸のみを尊ぶ世俗の儒徒をあざわらい、曹雪芹は女性の中に人間の純粋の美を発見したのである。

『紅樓夢』が『金瓶梅』を意識して書かれたものだということは、十分考えられることである。生来ロマンティストであった曹雪芹は『金瓶梅』があたかも淫奔が女性の本性であるかのごとくに描いているのに反撥し、美こそ女性の本質だと主張したのである。そこで相対的に価値が下落しているのは男性で「天下の靈秀、ひとり女子に鐘る」ということになっている。この言葉は「女の子は水で出来た体、男は泥で出来た体。僕は女の子に会うとさわやかな気分になるが、男に出会うと濁臭にむかむかする。」とともに『紅樓夢』の女性観を端的に語っている。存在自体が汚らしい上に、男は社会的存在であるだけに、世俗の種々の約束事に束縛され、妥協し、出世慾などにまどわされて人間の本性をねじ曲げている。それに対して女性は純粋さを保って行くことが出来る。こういう意味合いだから、女性といっても、『紅樓夢』が尊重しているのは、若く美しい女性に限る。うす汚くよごれてしまったり、根性のねじくれたような婆あは、問題外である。とはいえ、そういう老婆も女には違いないから困ってしまう。そこで主人公の賈宝玉は「あんなに柔敵な女の子が、年をとると、どうしてこんなにひどくなってしまおうのだろう。」と首を傾げざるを得ない。そして「結婚して男の濁気を受けたからに違いない。」と解釈するのである。

『紅樓夢』に登場する主な女性は、いずれも飛びきりの美人ばかりである。しかし、美人というだけなら『金瓶梅』の女たちも、み

な美人である。双方の女性をくらべて、まず第一に違ふ点は育ちである。『金瓶梅』では、潘金蓮は貧乏人の娘で、幼い時からあっちへ売られこっちへ転売された女。孟玉楼は商家の若後家。李瓶児は隣の細君。春梅は金蓮づきの小間使である。これに對して『紅樓夢』の女性は、氏も育ちもまず最高。宝釵、黛玉、探春、湘雲らは才学ともに男も遠くおよばぬものを持っている。中でも宝釵と黛玉は、抜群だが、この二人は、先にのべたごとく、容姿が対照的なように、氣質も正反対である。宝釵はおっとりとして円満な人柄で、上下の気受けもよく、世俗的な事務も、やらせれば立派にやってのける才覚を持っている。黛玉は才女型で、ついその才が表に出てしまう。人と調子を合わせることが下手で、感情的だから、宝釵のように上手に人を使うといった芸当は出来ない。それだけに人間としては黛玉の方が宝釵より純粹だといえる。宝玉にとってはこの純粹さ世俗に染まらぬ心の美しさが、なによりも嬉しいのである。そういうものを喜んでいるくらいだから、宝玉という男も世の中に通用する人間ではない。しかし、俗世に通用するということが、宝玉の目から見れば、俗物とそれだけ妥協して魂を汚していることであり、軽蔑すべきことなのである。だから宝玉は、科擧のための試験勉強などという下らぬものは大嫌いで、怠けてばかりいる。そんな時、宝釵は、いやでも少しは勉強して親を安心させるようにと忠告をする。宝玉にはそこが残念でならない。宝釵のような立派な女の子が、どうして鬚の濁物の考えなどに染まるのだらうと、惜しくてならないのである。その点、黛玉はそんな俗っぽい説教などはしない。そこに、宝玉と黛玉との心のつながりがある。女性の美に詩的な価値を認め、さらにそれを心の純粹さという点にまで掘り下げたのは、金瓶梅の作者が女性の醜をあげて見せたのと同時に、中国文学における記念すべき成就である。

『金瓶梅』の潘金蓮も『紅樓夢』の林黛玉も、ただの女性ではない。金蓮ほどの淫婦悪女がそうザラにあるものではなく、いたとすれば並はずれというほかはない。黛玉は、あるいは作者が理想化した女性かもしれず、またもしそのままの女性が実在していたとすれば、やはりそうどこにもいる平凡な女とはいえない。文学は異常なことを追うばかりが能ではあるまい。平凡な女性が平凡な一生を送る、その姿を描いたのが『浮生六記』である。この作品は前二者のように有名ではないが、異常な出来事のみを追う中国の小説（『紅樓夢』は作者の自伝的小説だとされているが、平々凡々たる生活を平凡に描いたものではなく、作者の境遇も異常なものがあつたではあるが、明らかに小説的な作為がどこにされている。）の中では異色のものである。作者沈復は清朝の乾隆から嘉慶にかけての人で、

妻とともにすごした生活の回想を、時にはやや感傷をまじえながらも、全体として淡々とつづつたものである。もっとも、作者自身は、これを小説という意識を持って書いたわけではないのだが。

彼の妻、陳芸は同年の従姉で、十三歳の時、作者が母にせがんで婚約した。結婚は二人が数え年の十九になった年の正月であった。作者の家は読書人の家柄とはいえ、父も地方官吏の顧問をしており、決して豊かではなかったが、夫婦は心から愛しあって、平穩無事の生活を送った。世の中には、せっかく夫婦になりながら、いがみあって暮している者があるが、これはどうしたわけか不思議でならない——と作者はのべているが、ことほどさように仲の好い夫婦であった。なにごともない幸福な生活が十五年ほどつづく。そのころ夫の友人が美しい妾を買ったのを見た芸は、自分の夫にもそれ以上に美しい妾を買ってやりたいと思いたち、妾の物色に熱中する。ところが偶然のことから夫婦は愁園という芸妓と同居することになった。芸は愁園が気品があつて美しいのを見、真情をもって彼女を説き、作者の妾になることを承知させる。しかし、愁園は芸者の身、作者には金がないと来ているので、事の運ぶのがおくれいているうちに、女はさる有力者に落籍されてしまった。これを知った芸は愁園の裏切りを深く憤ったが、そのために持病が重つて、夫と二児を残して死んでしまう。どうぞよい後添えをお貰いになつて御両親にお仕えし、子供たちを育てて下さい——といいのこす。そして涙にくれて見守る夫に、来世——といいかけてこと切れるのである。

これも周知の通り、中国は一夫多妻の国であつた。これには、先祖の祭を絶やさぬため、子孫繁栄のためという立派な理由があるとはいえ、女性にとっては重なる悪条件というはかばかはない。夫婦の間で、一方が愛情を分散させることが、相手にとって快いことであるはずはない。女性の不倫は、いかなる理由があろうとも、絶対に容認されることはなかつた。女性だけがこの束縛をうけていたのである。嫉妬は婦人の最大の失徳として、道徳で金縛りにされていたとしても、女性にとつて多妻の制度が、本来的に幸福をもたらすはずのものでないことは、いうまでもあるまい。嫉妬を失徳の第一としたこと自体が、女性の不満を抑えつけるためであつたらうし、多妻制に原因して女性が不幸に陥つた例は、歴史の上にも小説にも、しばしば見られるところである。手近なところでも『紅樓夢』の王熙鳳は、夫賈璉の妾尤二姐をいびり殺し、二姐はもちろん、みずからの不幸の種をも播いている。

『浮生六記』の陳芸は、愛する夫に美しい妾を持たせてやりたいと思つて、心をくだいた。これを、歪められた人間性とかなんとか

評するのは、わけのないことである。王熙鳳の嫉妬が女として当然のものであることはいうまでもあるまいが、陳芸の愛情も、彼女の真心から出たものには違いない。そして彼女は死ぬまで夫を愛し、夫からも愛されていたのだから、女の心としては幸福であつただろう。どんな悪条件でも、それを悪条件と意識しない時、そこに幸福があり得るものだということを、芸という女性は語っているようだ。幸福というものは、まことに奇妙なものだと思わぬわけには行かない。